

留学体験記～第2の故郷 ブラジルを訪ねて～

堀池 桃代

はじめに

初めまして。立教大学社会学部メディア社会学科3年、堀池桃代です。2016年2月から12月まで、立教大学の交換留学生第1号としてブラジル、サンパウロ大学（Universidade de São Paulo 通称 USP）に留学させていただきました。ラテンアメリカ講座では、大学入学後すぐから出国前まで、約2年間、中川ソニア先生のポルトガル語中級・上級を履修しました。

今回は、日頃よりお世話になっておりますラテンアメリカ研究所の皆様と出発前から応援してくださっているソニア先生と受講生の皆様に、私の留学について報告させていただきたく、このような機会をいただきました。また、これを読みサンパウロへの留学を希望する学生が増え、今後も彼らのサポートをするとともに、立教大学とUSPの関係向上に、私も何か貢献できればと思います。

I. 留学について

1. 留学の経緯

まずは、私がUSPに、またブラジルに留学しようと思った経緯について書かせていただきます。

私は幼い頃、父の仕事の都合で8年間、サンパウロに住んでいました。人生の半分を過ごしたブラジルは、私にとって第二の故郷であり、常に心の中にある「大人になったら必ず訪れたい場所」でした。しかし、具体的にいつブラジルに行くか、留学としていくのか仕事としていくのか何も考えてはおらず、小学校6年生から高校3年生までは、ブラジルはいつか戻りたい場所、いつか戻らなければいけない場所でした。

そんな私に留学という希望と目標を与えてくれたのが、立教大学ラテンアメリカ研究所でした。入学式後のオリエンテーションで、今まで存在すら知らなかった「ラテ研」を知り、さらにはポルトガル語の授業があること、提携が結ばれたばかりのUSPに、留学生第1号としていけるかもしれないということを当時の事務局担当の篠塚さんから教えていただきました。幼い頃から憧れていた南米一の大学と言われるUSPに、立教生第1号として行くチャンスがあるなんて運命だ！と感じ、この交換留学プログラムへの応募を目指すことにしました。当時入っていた

部活（体育会モーターボート・水上スキー部）や、履修していた教職や学部の授業などにより、忙しい毎日を送っていた私は、ポルトガル語の授業に毎回は出席できず、授業でも疲れが見えていたと思います。それでも励ましながら温かく受け入れてくださったソニア先生と受講生の皆様には本当に感謝しております。

さて、私がUSPに留学を希望した理由ですが、大きく分けて3つあります。

まず、小さい頃に親に守られながら、親の目を通して見ていたブラジルの文化を、人を、ブラジルという国を、大人になった自分の目で見たいと思ったからです。ブラジルに8年間も住んでいて、ブラジルが大好きであるにも関わらず、ポルトガル語も話せなければ、ブラジルについて熱く語ることも出来ない、そんな自分をこのブラジル留学で変えたいと思ったのです。幼い頃感じていたものを自分の目で確かめ、幼い頃とはまた違った発見をすることで、ブラジルへの愛を再確認出来るのではないかと感じていました。

次に、ブラジル人であれば誰もが一度は入学を夢見るUSPで南米一の教育を受けたかったからです。私が留学した学科は、国際関係学科（*Instituto de Relações Internacionais*, 通称IRI）です。特に留学生も多く、世界中から留学生が集まるこの学科で、国際関係学だけでなく、世界とブラジルとの関係を学び、日本と世界の関係も考えたいと思いました。実際に、この学科の授業でどのような経験をしたか、日本との授業の違いは何かについては後ほど章を改めてお話ししたいと思います。

3つ目は、日系社会の存在です。県人会のイベントに行ったり、習い事で会館を使わせていただいていたたり、よくお食事や別荘に呼んでいただいたり、私は幼い頃からブラジルの日系人の方々にお世話になっていました。その日系人の歴史や現状を知るために、私は高校の卒業論文で日系移民の歴史と現状について書きました。その際、様々な方にインタビューをして感じたのは、日本とブラジルの思いの行き違いでした。ブラジルでは移民100周年が盛大に祝われたのに対し、日本ではメディアに取り上げられることもあまりありませんでした。そしてブラジルにこのような大きい日系人コミュニティが存在し、歴史的にも大きな影響を与えてきたこと、ブラジル人から日系人たちがどのように受け入れられているかを知らない日本人が大勢います。ブラジルが大好きな私にはこれらの事実はとても寂しく、胸に突き刺さりました。そして、将来、何かこの両国の溝を埋めることの出来るような、新たなより良い関係を築く手助けが出来るようなそんな存在になりたいと強く思うようになりました。そのためには、やはり日系社会とそれがブラジルに与えた影響をこの目で見てその中に入り、肌で感じなければいけないと思いました。サンパウロには世界で一番大きい日系人コミュニティが存在します。また、USPには多くの日系人が通っています。彼らと共に学び、生活することで少しでもブラジルの中の日本について理解が深められるのではないかと感じました。

これらの3つの理由から、私はブラジルはUSPへの留学を希望し、交換留学に応募しました。

2. 準備（言語レベルの向上、事前の活動）

まず、出国前の言語学習についてです。USPとの提携はまだ新しく、私が入学した時には、交換留学の制度が整っておらず、留学応募の条件は未定でした。そのため、兎に角ポルトガル語

を思い出すために、ラテ研のポルトガル語講座、中級・上級をとることにしました。幼稚園こそ現地校に通ったものの、日本人学校で育った私は、一番話せた時代は幼稚園の3年間だったと言うくらい、ポルトガル語の能力などほとんどありませんでした。文法は全くゼロの状態からのスタートでしたが、週1回、3時間の授業を土曜日に受けることによって、耳がポルトガル語を思い出し、幼い頃、生活の中で聞いていたポルトガル語の言い回しや、食べ物や動物の名前が多少分かるようになりました。しかし、この時期、履修していた他の科目や部活などで忙しく、なかなか言語だけに焦点を当てて勉強することができませんでした。文法や単語などの基礎からポルトガル語の文章読解などもう少し力を入れて学習していれば良かったと反省しています。

また、大学入学後、特に留学が決まってからは、各地で行なわれているブラジル関係のイベントや講演会に進んで参加するようにしていました。そのような場で、ブラジル関係者の方と知り合う機会がたくさんあり、留学前にブラジルとの関係をさらに強くすることが出来ました。例えば、日伯学生会議の運営です。この会議については、高校在学時から通っていた横浜のJICAの移民資料館で知り合った方の紹介で携わることが出来ました。また、茨城県の中学校で在日ブラジル人の生徒の勉強を手伝うなどボランティアもさせていただきました。ラテ研の講座もそうですが、ブラジル好きが多く集まるところに自分から入っていき、留学前に様々な経験をさせていただけて良かったと思います。そして、このような活動や機会を通して、ブラジル留学経験者や現在留学中の他大学の先輩とも知り合うことが出来ました。立教大学で初めての交換留学生であったため、ブラジル留学経験者が周りにおらず、何も情報がなく不安だけであった私に、これらのご縁はとても有難いもので、勇気をくれた気がします。

Ⅱ. ブラジルでの生活

これまで、留学に至った経緯や留学前の準備などについてお話ししました。では、ここからはブラジル到着後の経験について書いていきたいと思います。

1. ブラジルの印象

2016年2月3日、日本を出発し約40時間後の（デトロイトで飛行機トラブルがあり、乗り継ぎに時間がかかったため）現地時間2月4日深夜に、サンパウロはグアルーリョス国際空港に到着しました。着陸前、飛行機の窓からサンパウロのオレンジ色の夜景が見え、トラブルに見舞われながらもやっと辿り着いた達成感と、懐かしい大好きな故郷にやっと帰ってこられたという嬉しさ、そして本当に来てしまったんだという不安が入り混じった何とも言えない気持ちになりました。約10年前に住んだことはあるものの、親も友達もいないほぼ知らない街に、独りで降り立ち、新たな生活を始めると思うとやはり不安もありました。綺麗な夜景を見ながら、魔女の宅急便のキキになったような気分で、いよいよだぞとより一層気を引き締めました。

到着した次の日には、日系人の知り合いについてきてもらい、早速連邦警察に行き、RNE（外国人登録）とCPF（国民一人一人に振り当てられた国民番号）の申請を行いました。連邦警察は様々な国籍の外国人で溢れていて、多民族国家であるブラジルで外国人が生きていくことの

難しさを目の当たりにしました。

サンパウロの道を歩いていると懐かしいものが沢山目に入ってきて、olelhão（大きい耳の意）と呼ばれる電話ボックスや、黄色いラインが側面に入ったESCOLAと書かれたスクールバスなどを見るだけでも帰ってこられたのだなと嬉しく感じていました。

翌日6日からは、1週間カーニバルのために、リオデジャネイロに行ってきました。私は運が良く知り合いの伝手でカーニバルを見るだけでなく、パレードに衣装を着て参加することができ、ブラジルにいるからこそ、いたとしても普通出来ない経験をすることができました。ブラジルの熱い夏と人々の明るさや文化を自分自身が参加することにより、肌で感じることができましたと思います。リオデジャネイロはサンパウロとはまた違ったブラジルらしさがあり、到着2日後にはリオにいた私にとって、最初の強いブラジルの印象は「カーニバルのある暑い夏」といったものになりました。この経験をブラジル人に話す度に「ブラジル人以上にブラジレイラだね！」と皆からとても興味を持たれました。



写真① リオのカーニバルに参加。参加チームは13年ぶりに優勝（2016年2月）

2. 住まいについて

ほとんどの留学生はキャンパスの近くにあるヘプブリカと呼ばれる学生寮のような集合住宅に住んでいました。これは、一軒家の中の部屋を学生に安い値段で貸し出しているもので、キッチンとトイレは共同で使います。私もこのタイプの家で2回住みました。色々な住まいを経験してみたかったため、ホームステイやアパートのシェアもしました。行った先々で友人に恵まれ、海外からの留学生と知り合うことも出来、お互いの国の文化もたくさん学ぶ事が出来ました。3か月ほど住んでいたブタントンキャンパスの周りは、治安が悪く（第三門のすぐ近くにファベラがあり、そこはブラジル人でさえよく強盗にあいます）授業終わりに夜帰る時はバス停から走って坂を駆け上がっていました。



写真② 同居人と日本食を作り手巻きパーティー（2016年9月）

3. 苦労した事

留学先で一番苦労したと思われるのは、ビザの延長です。元々、立教大学側からは1年、2セメスター期間の交換留学と伺っていましたが、USPからは1セメスター分の受入証明書しか出ませんでした。そのため、日本で発行された学生ビザは9月までで、こちらに来てから、学期の延長手続きと、ビザ延長手続きを同時に進めなければなりません。USPから受け取った正

式な書類であるにも関わらず、毎回何かと理由をつけて突っ返されてしまい、取り合ってくれる職員の言うことも毎回変わり……結局、5回以上連邦警察に行き手続きの申請を行いました。一人で行くこともあれば、日系の友人を連れて行くこともあり、連邦警察のビザ申請デスクで泣いたこともありました。

結局、6月から始めた延長申請は8月末によく受理され、新しいRNE（外国人登録）カードが取れたのは帰国のせまる12月末でした。

Ⅲ. 大学生活について

1. 学期の始まり

さて、カーニバルから帰ると直ぐに、大学のオリエンテーションが各学科で始まりました。私の所属する国際関係学科（今後はIRIとします）では2月15日に、留学生向けのオリエンテーションが行われ、そこで出欠、単位の話から、サンパウロのメトロやバスの使い方などについて説明を受けました。130ページものスライドが使われ、情報量の多さに驚くと同時に、これから始まるんだ！と胸が踊りました。IRIの留学生は前期に約20人、後期に約15人と少ないですが、一学期に100人以上の留学生を受け入れる文学部と比べると国際交流課（各学科に事務所がある）の対応なども丁寧でした。

オリエンテーション当日から、授業見学が出来、それからほぼ毎日朝8時から午後5時半（私の場合夜の授業はとらないので）まで色々な学部授業見学をし、3月第1週目に履修登録を行いました。

2. 授業の様子（私の履修状況）

IRIでは、1、2年生は毎日午後4時間の必修科目があり、国際関係学の基礎を学びます。3、4年は自由科目や英語での授業、また他学科との単位互換もできるよう。私は、1～4年ほぼ全ての授業を見学しましたが、2年生以上の科目は発展したものばかりでとてもついていくことができませんでした。立教大学ではメディア社会学科に所属しており、国際関係学を学んだことがない私にとって、専門用語をたくさん使ったポルトガル語での授業はポルトガル語とはまた別の異言語に聞こえました。そのため、スラ



写真③ USPのシンボルである時計塔
「Placa de relógio」
(2016年6月)



写真④ IRIのクラスメイトと授業後に
(2016年3月)

	月	火	水	木	金
10-11時				地名学	トゥピ語
11-12時	ポルトガル語会話		ポルトガル語会話		
12-13時					
13-14時					
14-15時					
15-16時		お話会	ミクロ経済学		
16-17時					
17-18時					ブラジル文化
18-19時					

前期の時間割

	月	火	水	木	金
10-11時					
11-12時	ポルトガル語会話		ポルトガル語会話		
12-13時					
13-14時					
14-15時			ポルトガル語	国際関係学の基礎理論	
15-16時		お話会			
16-17時					
17-18時			パテリア(楽器隊)		ダンス
18-19時					

後期の時間割

ブラジルでしか学べない内容であり、大好きなブラジルについてブラジル人でさえ知らないような深い専門的な知識を得ることが出来たため、毎回の授業がとても新鮮で楽しみでした。

ポルトガル語習得のためには、工学部（通称POLI）の学部が運営する言語センターで別途で費用を払い、通年のポルトガル語会話の講座を受講しました。この授業は他の学科の授業とは違い、様々な学部の留学生や社会人が多く、今までにない国際色豊かな（インド、シンガポール、韓国、日本、アメリカ、メキシコ、チリ、コロンビア、ベネズエラ、ドイツ、オランダ、フランス、イタリアなど）クラスメイトを持つ機会に恵ま

れました。授業の後、メキシコやチリ、韓国の友人たちとUSPの安い学食Bandejão（大きいお盆という意味。金属製のBandejaをプレスしてあり、その窪みをお皿とし食べ物を入れていくためそう呼ばれていました）に行くのは毎週の楽しみでもありました。



写真⑥ Bandejãoの食事1.9リアル

イドを使つての説明や板書がある基礎の授業を1年生と一緒に週に1科目だけとることにしました。前期はミクロ経済学、後期は国際関係学の基礎理論を履修し、週4時間の授業と課題テストに追われ、この学科の科目は両学期とも、私が履修した中で一番ハードな科目でした。

さらに、日本にいた時から興味を持っていた先住民Tupi Guarani 族の言語の講義をこの分野の権威でいらっしゃるEduardo de Almeida Navarro教授から受けました。また、この言語からも強く影響を受けているブラジルの数々の地名について勉強する地名学の授業と、留学生向けのブラジル文化の授業も文学部（通称FFLCH）で履修しました。これらは、どれも



写真⑤ 前期ポルトガル語会話のクラス (2016年5月)

このように、所属するIRIの授業を前期、後期に1科目ずつ、文学部の授業を3科目、ポルトガル語の授業を通年で受講していました。私は、3つの学科で授業を受けましたが、学科ごとに学生の雰囲気や授業の様子が異なり、毎日大学の違った一面を見ることができました。特に、印象に残ったのが、IRIの授業の様子です。IRIは、USPの中では新しい学科であり、様々な専攻に

分かれている他学部と比べると、人数や授業数も少なく、建物や学科の規模も小さいのが特徴です。そのため、現地学生同士もほぼ全員が知り合いで、学科自体アットホームな雰囲気でした。驚いたのは、先輩が後輩の面倒を見る制度まであり、学科全体での結束力や仲間意識が強かった点です。この結束力は授業中にも感じることができました。教授との距離も近く、下の名前で呼び授業中もいつでも質問がしやすい環境がありました。質問は授業後まで待つという日本のような光景はなく、わからないことがあればその場で手を上げて質問し5分に一度は誰かが発言していました。その誰かの発言に対し、答えるのは教授一人ではなかったことにまた驚きました。教授補佐（主に大学院生）や周りの学生が質問に答えたりその意見をさらに掘り下げたり、教授の一方通行の講義ではなく、皆で作りに上げている授業という印象を受けました。

3. サンパウロ大学

さて、ここで少し私の1年間通ったUSPについて紹介したいと思います。

USP (Universidade de São Paulo) はサンパウロ州内に分散する5つのキャンパスと、ブタントンのメイン・キャンパスからなる州立大学です。総面積76.4km²もの敷地に、87の学部（病院や研究所を含む）を持ち、約9万5千人の学生をかかえる、名実ともにブラジル最大にして最高の大学とされています。ラテンアメリカで最も偏



図① ブタントンキャンパスの地図

差値が高く、南米の東大と呼ばれるほどの難関大学です。私の通っていた、ブタントンキャンパスは、最も大きいキャンパスであり、ほとんどの学部（法学部、農学部、観光学部などのキャンパスは市外）がここに校舎を構えています。このキャンパスはCidade Universitária（学園都市）であり、キャンパス内には、校舎、学生寮、学食の他に、病院や銀行、美術館や映画館、スポーツセンターなどが存在します。また、大学の敷地内は自然が豊かで川（川のほとりではカピバラ

を見ることもできます）や森もあり、サイクリングやランニングをしている一般の人もよく見かけました。また、州立大学であるため、学費に加え、病院の診察や美術館、映画館など構内のほとんどの機関が無料です。

私の所属するIRIは地図にあるFEA（経済学部）とPOLI（工学部）の裏にあり、学内循環バスで5つ目のバス停「FEA前」で降りそこからさらに15分くらい奥に歩いたところにあり、バスの使い方を習得するまでは自分の校舎に向かうだけで疲れ切っていました。



写真⑦ 大学構内を循環するバスは1周1時間以上かけて回る。

4. 大学内の活動



写真⑧ 後期から参加し始めたブラジル式ベリーダンスのレッスン
(2016年12月)

授業以外の大学内の活動としては、授業後にIRIのバテリアの練習（バテリアとは、各学部のスポーツチームの応援をするために各部に存在する応援団で、サンバのリズムで楽器演奏と掛け声を練習します）に参加したり、ブラジル風ベリーダンスの講座を受けたり、授業後の学内生活も楽しむことが出来ました。

さらに、毎週火曜日の午後にも、お話会というものを開催していました。この会は、現地の日本語学習者と日本人のポルトガル語学習者が集まりお話をする、というものです。日本語や日

本の文化に関心があるブラジル人学生や、日本語の練習がしたいという日系の学生と共に、日本語、ポルトガル語1時間ずつ時間を区切って会話をし、言語の練習をしました。ここで、日系の友達も作ることができ、言語の練習だけでなく、その後の生活や授業を助けてもらうこともありました。

Ⅳ. 課外活動

ここからは、私が留学生活中に行った学外での活動について幾つか書きたいと思います。様々なご縁があり、出会った多くの方にお声がけいただき、幅広い分野で色々な経験をさせていただく事が出来ました。

1. リオ五輪の通訳ボランティア

2016年に行われたリオ五輪は、南米初のオリンピック、パラリンピックということで世界中から注目されており、4年後に東京五輪を開催する日本にとっても大切な大会でした。私個人にとっても日本とブラジル、大好きな2つの国を繋げる特別なイベントでした。そんなオリンピックが私の滞在中にあるということに運命のようなものを感じ、絶対にこの大会に携わりたく強く思いました。

大会に関われる機会を探していく中で、ある公式ボランティア募集を見つけました。しかし、この募集は他大学の学生向けで、私には応募資格が無かったため、責任者に直接交渉し、やっとのことでオリンピックの公式ボランティアの面接まで漕ぎ着けました。その後、リオオリンピック委員会の国際ボランティア担当者とのス



写真⑨ 女子バスケのメディア通訳ボランティアの仲間たちと（2016年8月）



写真⑩ 私が働いていることを知り、バスケの試合会場に友人たちがチケットを手に入れ、観戦に来てくれた。(2016年8月)



写真⑪ 男子ラグビー準決勝戦後、キャプテン桑水流選手にインタビューしている時の様子 (2016年8月)



写真⑫ ラグビー日本選手団の皆さんと (2016年8月)

カイブ面接(英語とポルトガル語)を経て、メディア通訳することに決まりました。USPの日本人留学生で、オリンピックの公式ボランティアを経験できたのは私だけであり、このボランティアの経験はとても誇らしく、自分の自信にも繋がりました。

実際にさせていただいた仕事は主に2種類です。開会前の1週間は、世界から集まるメディアの中心地であるMedia Press Center (MPC)で、各国のジャーナリストの受付をし、IOCのメディア担当者の元で各国へのチケットの振り分けなどを行いました。競技が始まってからは、リオ北部のデオドロスタジアムで、女子バスケ、女子ホッケー、女子・男子7人制ラグビーの試合後のインタビューの日本語、ポルトガル語間通訳をしました。最初は女子バスケだけの担当でしたが、パーク内の色々な所に呼ばれ、後半は3つの競技を掛け持ちし、大変忙しくなりました。

特に盛り上がったのは、7人制ラグビーの試合です。世界中の誰もが、ここまで日本が勝ち上がることは想像しておらず、強豪国を相手に善戦を続ける日本選手団への世界中からの声援に、心が躍りました。メディアブースから、他のスタッフやメディア関係者と観戦していたのですが、日本人選手の得点や好プレイの度に「Amazing!!!! 後であの選手に質問したいから、背番号と名前メモしといて!」と声をかけられ、日本チームの活躍を喜ぶのと同時に、自分の仕事の責任の重さを感じました。

また、この時私は、他のメディア通訳ボランティアの誰もしていないような素晴らしい経験を

させて頂きました。日本チーム最後の試合であった、準決勝の後、キャプテンの桑水流選手に一对一でインタビューさせていただいたのです。本来なら、ボランティアの仕事は通訳のみですが、私がいつもついて通訳をしていたラグビー会場のメディア責任者が、質問の内容や、インタビューまで任せてくださいました。日本は惜しくも4位という結果に終わり、この試合で引退であったキャプテンが涙を流しながらコメントする姿に、私も泣きながらインタビューしました。試合終了後、会場裏で、日本選手団が肩を組み「上を向いて歩こう」を歌っている姿

を見たときは、全身に鳥肌が立ち、本当にオリンピックボランティアをさせていただけて良かったと思いました。

パラリンピックでは、立教生の若杉遥さん（同学部、同学年）が、日本代表選手として出場されるので、オリンピックの時の上司に無理を言って、何とか彼女の種目であるゴールボールに関われるように調整してもらいました。地球の裏側のパラリンピックという大きな大会で、自分の同期が頑張っている姿をどうしてもこの目で観て、応援がしたいと思いました。また、何か若杉さんのサポートが出来ないかと思い、今回もメディア通訳のボランティアをさせて頂きました。



写真⑬ パラリンピック、ゴールボール日本代表の立教大学若杉選手（2016年9月）

若杉さんの応援は、日本から駆け付けてくださった立教大学副総長の山口先生と、現地在住の山本マルタさん（ブラジルから立教大学へ来ていた、元留学生）と一緒に、サンパウロ立教会の先輩から預かった立教の小旗を振りながら行いました。インタビュー通訳の後、若杉さんのためにリオに来たこと、応援している人がブラジルにも沢山いることを伝えることも出来ました。

私は担当の仕事を終え、パラリンピック期間中に、サンパウロに帰ったのですが、2日後には「東京都知事が明日、ゴールボール観戦に来ることになった」と、急遽呼び戻されました。そこでは、小池都知事の誘導、調整役の方の通訳サポートをさせていただきました。

この2か月弱の間に3回リオを訪れ、合計4週間以上もリオに滞在しました。これは1年間で最も印象に残っている、そして一番力を注いだ活動であり、ブラジル人だけでなく世界中から集まったボランティアスタッフとともに感動を作り上げたという経験は私の人生の財産になりました。



写真⑭⑮ ボランティア仲間と一緒に（2016年9月）

2. 留学生の会

USPの日本人留学生数人と、「ブラジル留学生の会」を6月と11月の2回開催しました。この会では、サンパウロで働く社会人の方々に仕事の内容や南米での事業展開等について講演をしていただきました。各回15人ほどの社会人を講師としてお招きし、学生もブラジル全土（北はアマゾン、南はリオ・グランデ・ド・スルまで）から50人集まりました。6月の反省をもとに11月はさらに良いものをと実行委員で何度も話し合い、多くの方に協力していただきながら両会、無事に開催することが出来ました。実行委員として携わせていただけたこと、また、一参加者としては、普通はあまりお会いできない社会人に、ブラジルだからこそ伺えるお話を聞き、ブラジルで働くことがどのようなことかを学び、考えることはとても良い経験になりました。



写真⑩ 6月に開催した留学生の会

3. よさこい

今年15周年を迎えるブラジルよさこい大会を記念して、何か企画しようと、主催されている方が日本からJICAのシニアボランティアのよさこい経験者の方を招かれました。その方のお手伝いをさせていただく機会をいただき、ブラジルよさこいチームの調査をしたり、一緒にチームに入りよさこいの練習をさせていただいたりしました。

もともと、大学でよさこいチームに入り活動していた私にとって、自分の好きなことを通して、ブラジルと日本の文化交流に携わることができるなど、またとないチャンスでした。大会

の開催は、私の帰国後なので、活動が活発になり始めたところで、あまりお手伝いが出来ないまま帰ることは悔しかったですが、この経験を何かに活かせたらと思います。



写真⑪ 北海道文化協会のよさこいチーム「一心」の皆さんと練習後に地元の名物である巨大Bauru(サンドウィッチ)を食べに行った。(2016年10月)

4. その他のボランティア活動

最も印象に残っているのは6月に行われたFestival do Japãoでのお手伝いです。世界最大の日本祭りと言われるこの祭りは、各県人会が食べ物の出店をし、さらに日系企業やJICA、ジャパンハウスなどが宣伝や展示などをしていて、日本文化紹介も多くあるため、現地の人々も毎年楽しみにしているイベントです。私は、CIATE（日伯雇用サービスセンター）の方たちと折り紙指導や、お客さんの名前を筆ペンで書いてプレゼントするなどの仕事と、日本にある日系ブ

ラジル人コミュニティの紹介を手伝うなどしました。

サンパウロは世界で最も日本人の多い地域(日本の外で)だということは知っていましたが、ここまで日本の文化や食べ物が現地の人に愛され、日本の存在がこの国にとって大きいことは知りませんでした。それを気づかせてくれたこの大きいイベントに携わることができて良かったです。

さらにこの経験がきっかけとなり、サンパウロ市外の日系コミュニティのある町に連れて行っていただき、農家や日本語文献の図書館、太鼓の練習(何度かブラジル全土の大会で優勝したこともある強いチーム。練習に参加もさせてくれました)などを見学することができ、今も受け継がれる日系社会の伝統や日本の心を、地球の裏側で発見することが出来ました。

またその他のボランティアとしては、日系の栗農家で栗加工の作業のお手伝い、障害者スポーツである卓球バレーというスポーツの大会、サンパウロ市内の幼稚園などに行かせて頂きました。

5. ニッケイ新聞でのインターン

2. で記した留学生の会と、その2週間後に開催された4. の卓球バレーについて、取材し、自分で記事を書いてみました。そして、現地新聞社ニッケイ新聞の方に添削、ご指導いただき、二つとも記事にさせていただくことができました。メディアにもともと興味があったため、この経験は、記事を書くこと、取材すること、人々の興味を引くことの難しさなどを学ばせていただき、大変ためになりました。

6. その他(旅行)

ブラジルの国土は日本の23倍もあると言われ、北部、北東部、中部、南東部、南部と大きく5つに分けられます。北はアマゾンのジャングル。北西部は、サルバドールなど奴隷制のあった時代に栄えた街と美しいビーチ。計画都市である首都ブラジリア、パンタナールの巨大な湿地帯が存在する中部。ヨーロッパ移民の多い南部。サンパウロやリオデジャネイロなどの大都市が集まる南東部。州によって



写真⑱ 日本祭りに来た友人がブースに遊びに来てくれた。(2016年6月)



写真⑲ アチバイアの栗農家でお手伝い(2016年3月)



図② ブラジルの州区分地図

街によって、気候や地形、文化や食べ物、肌の色までが全く違い、少し移動するだけでその度に、言語こそ同じものの違う国に来たかのような印象を受けていました。ここでは、私が旅行した地域の写真とキャプションを載せたいと思います。



写真⑳ サンパウロ対サンベルナルドのサッカー観戦。ブラジルのサッカー熱はやはり凄い。



写真㉑ オクトバーフェストで有名なブルメナウ。地元の人々がビールを分け、輪に入れてくれた。



写真㉒ 日系人コロニアPinhalを訪れた。



写真㉓ イグアスの滝



写真㉔ 様々な国籍の留学生と旅をしたパンタナールの湿地帯



写真㉕ パンタナールの道路を塞いでいたアナコンダ



写真⑳ ウユニ塩湖にバックパック旅行



写真㉑ ブラジルとの国境を陸路で越えてペルーへ入国



写真㉒ インカ帝国の遺跡マチュピチュ



写真㉓ 友人宅でシュハスコパーティー

V. 留学を終えて

1. 留学中の学習・成果、今後の学習について

まず、国際関係学について。日本では社会学部メディア社会学科に所属しており、今までこの分野は学んだことがありませんでした。歴史、法律、経済、哲学、など様々なものを含むこの分野はとても難しく、同時にとても魅力的なものでした。前の章でも述べましたが、言語がまず分からない私にとってはスライドも使わず教授が語るだけの授業は全くついていけないのではなく、結局同じ立場である同学科の1年生たちとともに、基礎から学ぶことにしました。基礎と言っても、南米の東大と言われるUSPで、しかもポルトガル語で行われる4時間の授業について行くことは出来ず、英語の教材や、日本語での説明も探しやすそうな経済学の授業を選びました。経済も全く勉強したことがない私にとって、ミクロ経済学の授業は未知の世界でしたが、辞書を片手に、英語の教材とポルトガル語のスライドを読み解き、インターネットで検索しながら、日本語の同じ経済用語を探し、さらにその説明を探して理解する、ということを1セメ

スター続けました。後期には、国際関係の基礎理論の授業を取り、歴史上の人物が考えてきた哲学、倫理的な理論や、今の時代でも国際社会の考えの中心となっているような考え方を学びました。経済の話なども授業で登場することがあり、すべての発展系であるこの学問を日本に帰国しても勉強し続けたいと思いました。

次に、文学部で履修した様々な授業について。先住民の言語や、ブラジルの地名学、ブラジルの政治や文学、音楽などを含めた文化の授業などを通し、ブラジルという国を感情や趣味の面からだけでなく、学術的に見つめることが出来ました。全て、ここ、ブラジルの大学でしか学べないことであり、内容や言語はやはり難しかったですが、学ぶ価値のあるものでした。今後も、ポルトガル語のレベルを落とさず、言語の勉強をしっかりとするとともに、ブラジルの文化や情勢なども含めて学んでいきたいと思えます。



写真⑳ USP地名学の授業の様子

2. 留学全体に対する自己評価

IV章で記したように、留学全体を通し大学の勉強以上に、様々な課外活動に力を入れました。転がってきたチャンスは全て掴んだし、後悔のないくらい、自分のやってみたい、知りたかったことには全て首を突っ込み挑戦しました。元から、色々なことに興味があり、1つに絞って何かを突き詰めるというよりは全てやってみたいという欲張りな性格ではありましたが、色々な縁と機会を与えてくれたブラジルが、自分をますます積極的に成長させてくれたと感じています。同じ世代はもちろん、大学の国際交流課の人の子どもや親戚と仲良くなったり、ボランティアで知り合ったおばあさんの家に招待してもらったり、色々な所属の幅広い世代の人と親しくなれ、友人関係をとにかく広げることができたことはとても良かったと思います。



写真㉑ 立教大学ラテンアメリカ研究所所長丸山教授と、日本女子大学北村教授を囲んだ立教会の食事会（2016年9月）



写真㉒ 立教大学法学部早川教授・溜箭教授がUSPに特別講演でいらっしゃった際に、お二人とUSP二宮教授、サンパウロ立教会会長山口様と。USP法学部にて（2016年11月）

また、国際的な大きいイベントで働いたことで、ブラジルにいながら世界中に仲間ができた、日本の良さに気づけたりと将来を考えるきっかけになる出会いも多くありました。繋いで貰った縁や、いただいたチャンスなどのおかげで、200%ブラジルを満喫し、想像以上の経験ができた留学となりました。また、USPで行われた立教大学教授の講演会に行かせていただいたり、サンパウロ立教会の先輩方に進路の相談に乗っていただいたり……と、立教の学生だからさせていただけの経験も多くありました。次期留学生とUSPとの交渉の仲介など、立教大学とUSPの交換留学生第1号という役目も果たせたのではと感じています。今後も、大学間の関係の発展のため、私にできる事を探し、サポートできたらと思います。

3. 今後の留学生へ

私のブラジル留学は、親の説得から始まりました。長年、サンパウロで生活した両親はブラジルの良さはもちろんどれだけ危ないかを肌で感じて覚えています。子どものやりたいことは応援し、支援してくれる両親ですが、やはり娘を一人でブラジルに送ることはできないと、初めは許してくれませんでした。心配しても、どれだけ注意をしても、危ない目に合わない保証はありませんし、実際何度も怖い思いはしました。ですが、あの時、怖いから危ないからとブラジル留学を諦めず、必死に両親を説得して本当に良かったと思います。

朝起きる度にブラジルにいる!!と飛び跳ねたくなったり、大学のバスに乗っているだけでウキウキしたり。スーパーに出かけるだけで大笑いしながら全身ずぶ濡れ（スコールのため）で帰ってきたり……と毎日が冒険で楽しくて仕方ありませんでした。

近年ますます治安が悪くなっているようです。私も多くの人にご心配をおかけしながら出国しました。そして、1年間、現地でも本当に様々な人に助けていただきながら生活していました。

ブラジルは、音楽やサッカー、踊りなどの文化や色々な国の文化の混ざった食べ物、陽気で親しみやすくどんな人でも輪に入れてくれる温かい人々……来てすぐにこの国を大好きになる要素が沢山あります。また、その温かい人々は、挨拶するだけで、どこでポルトガル語を学んだんだ!と大騒ぎし、褒めてくれ頑張って理解しようとしてくれるため、言語の上達も早いと思います。

留学するならブラジルです。人生で一番楽しい充実した1年がきっと待っています。そして、留学した際には、世界最大の日系コミュニティやこちらで働いている日本人とも積極的に関わり、こちらでしか出会うことの出来ない人との関係を大切にしてください。

4. 今後の計画、方針

ポルトガル語の学習（会話ではなく、主に文章読解とライティングに力を入れます）を継続し、現地で受けることの出来なかった、ポルトガル語能力検定試験を受ける事を目標にします。また、帰国後は社会学部で、エスニックコミュニティを専門とする教授のゼミに所属し、在日日系ブラジル人についてより深く学び卒業論文に繋がりたいです。また、課外活動として、彼らのコミュニティでのボランティアなどを継続し、ブラジル留学前とは違った形での貢献が出来るように努めたいと思います。まだ、将来の仕事は模索中ですが、卒業後もずっとブラジルと関わって

いきたいです。

今、留学を終えてから、悩んだ期間や、準備を含めたこの留学という経験が、そして人との繋がりが、自分の大学生生活を、そして人生を素晴らしいものにしてくれたと改めて感じています。また、留学前は、ブラジルが全てだった私も、留学を終えた今は、留学はゴールではなく新たな夢を持つきっかけであったことに気づくことができ、新たな視点で物事を考えられるようになりました。次の夢と目標に向かいこれからも様々なことに挑戦していきたいと思います。

最後に、留学前からサポートしてくださった、国際センター、ラテンアメリカ研究所の皆さん、USPとの提携を結んでくださり現地でも大変お世話になったUSP法学部教授の二宮先生、両大学の先生方、出国前から様々な相談に乗ってくださり常に頼らせていただいたサンパウロ立教会の先輩方に、心よりお礼申し上げます。帰国の数ヶ月前から楽しみに帰りを待っていた友人たち、留学期間常に心配してくれて応援してくれていた家族にも感謝の気持ちを伝えたいです。何より、私を温かく迎え入れ、かけがえのない居場所をくれたサンパウロ大学、ブラジルの人々。彼らにどのように恩返しを出来るか考えながら、残りの大学生活を過ごしていきたいと思います。



写真③④ 友人が開いてくれたお別れ会

(ほりいけ ももよ 2014-2015年度本講座ポルトガル語特別受講生)